



## 池間博之先生に RSCDS 功労賞！



日本にスコティッシュ・カントリー・ダンシングを紹介し、今日の姿に発展させた功績をたたえ、ことし 11 月のパースにおけるソサエティ年次総会において池間博之先生に RSCDS 功労賞が贈られます。池間先生、おめでとうございます。

RSCDS 功労賞は、スコティッシュ・カントリー・ダンシングにおける最高の榮譽で、野球界であれば野球殿堂入りにあたります。池間先生の受賞は東京ブランチだけでなく、日本のスコティッシュ・カントリー・ダンシングの実力が世界に認められたあかしであり、まことに喜ばしいことです。

池間先生は 1960 年代初期の米国留学中、ニューヨーク・ブランチにおいてスコティッシュ・カントリー・ダンシングを勉強され、帰国後、SCD 未開の地であった日本でこのダンスを普及し、多くの人にその楽しさを知ってほしいと、力をつくしました。日本フォークダンス連盟のオピニオン・リーダーの 1 人として、故原田裕氏とともに同連盟を代表してレコード会社に SCD 音楽レコードの発売を働きかけ、ついに実現させたのです。

1963 年、留学からの帰路、ソサエティ本部を訪れた池間先生は、ミス・ミリガンから将来東京においてブランチを作るよう強く激励を受け、以後ミス・ミリガンが 1978 年に亡くなるまで、ミス・ミリガンとの通信が続きました。ミス・ミリガンは池間先生を「ケム Kem」というニックネームで呼んでいました。

1974 年のセント・アンドルーズで、池間先生は翌年のエリザベス女王の初回日本訪問に合わせ、ミス・ミリガンにソサエティを代表するティーチャーの来日を依頼しました。ミス・ミリガン自身、「わたしが行く」と言っていたのですが、かの女は医師から旅行不可を宣告されており、代わりに卓越したティーチャーの派遣を約しました。

こうして 1975 年、ビル・クレメント氏の来日が実現し、各地における講習会は大盛況を呈し、日本における SCD の普及と理解がいっそう進展しました。

1981 年、日本におけるブランチ設立の機運が高まり、本部の予備承認を得た池間先生はブランチ設立に奔走します。RSCDS がどのようなしくみであるか理解している人は限られ、ブランチ設立によって自分の領分をおびやかされると誤解するグループ・リーダーもいて、結成は困難を極めました。当時は Fax も電子メールもなく、本部セクレタリ、ミス・ギブソンとの連絡は郵便だけで、いまでは考えられないほどの手間と時間を要しました。本部から「ブランチ設立はまだか？」の問合わせが半年ごとに到着し、その返信を作成する池間先生の当時の苦衷がしのべられます。

かくして、予備承認から 3 年後の 1984 年、ようやく RSCDS 東京ブランチが設立され、以後日本のスコティッシュ・カントリー・ダンシングは今日の隆盛を見るまでにいたったのです。

池間先生はいわば皇帝ネロのローマにおいて、キリスト教の布教につとめたペテロの役割を担ったといっても過言ではありません。

池間先生のはなし：功労賞 (Scroll of Honour) は RSCDS への卓越した貢献 (Outstanding Service) をした人に与えられる、と記されています。

私が認められた理由をよく考えてみますと、本部指導者が来日した際に、みなさんが心からの対応を行なったこと、熱心な日本人ダンサーの好印象や多くの日本人会員が多額の会費を納め、CD や教本をたくさん購入しているなどにあるのではないかと思います。

踊りが好きで長年やってきただけですが、それが功労賞につながり、たいへんありがたいと思っています ■

## 新チェアマンに五十嵐さん

- 2004 年度年次総会 -

6月5日午後、幡ヶ谷社会教育館において東京  
ブランチ年次総会が行なわれ、みなさんに事前送  
付した議案書原案が承認されました。くわしい討  
議内容は別途お送りする 2004 年会報をご覧ください。討議の概略はつぎのとおりです。

### 1. 2004 年度運営委員会・委員

8名の委員が承認され、その後の委員会におい  
てつぎのとおり役員および通常運営委員が選出  
された。

チェアマン	五十嵐 成子
セクレタリ	中田 多鶴子
トレジャラ	松村 茂
通常運営委員	大井 富佐子
同	兼松 千奈美
同	境 雅子
同	トム 鳥山
同	吉江 紀美

### 2. 2003 年度活動報告および決算報告

上記委員選出に先立ち、2003 年度運営委員会に  
より報告がなされた。

Q-Examinations で、残金をみると積立金を支  
出していない。

A-フル試験組は宿泊費割引を受けたので、結  
果として支出していないような形になったが、予  
備試験組は不足が生じ、支部会計から充当した。  
残金は今後の Exam で使う。

Q-ショップの余剰金が多いが、ポンドの換算  
レートは？

A-仕入先は英国だけでなく、オーストラリア、  
カナダなど多様で、一概に何円と答えられないが、  
英ポンドは¥200 前後で算定した。

Q-チェアマンはティーチャーズ・クラス実施  
によりレベルアップをはかりたいと表明してい  
たが？

A-会場確保の問題、支部行事実施に追われ、  
実行できなかった。おわびする。

### 3. 2004 年度活動計画および予算

Q-インターミディエイト・クラスの拡大とあ  
るが、どのような内容か？

A-ビギナーズ・クラスに何年も参加している  
人が多くいるが、月曜以外のクラスに参加できな  
いという事情がある。現行の土曜クラスに加え、  
月曜午後のインターミディエイト・クラスを考  
えている。

Q-ステップ・ダンス・クラスを別個にやるこ  
と、支部ダンス会にステップ・ダンスのディス  
プレーを入れることを考えてほしい。

A-ステップ・ダンスをどのようにするかは常  
に委員会の討議事項であった。会場確保、講師の  
都合などで進展なく 1 年を経過したという次第  
で申しわけない。2004 年度で進展をはかりたい。

## 池間先生 RSCDS 功労賞受賞 祝賀ダンス会

池間先生の受賞を記念し、お祝いするた  
め、つぎのとおり祝賀ダンス会を開催いたし  
ます。ご予定ください。

11月3日(水・祝) 11-4.30

定員 100名

青山・はあといん(旧名健保会館)

東京メトロ・乃木坂駅直結

ピアノ 小海弘子

会費 ¥10,000 の予定

(くわしくは次号ブランチレターで)

Q-インタナショナル・ウィークエンドはどの  
ような内容を考えているか？

A-講師、ミュージシャンに大まかな時間割は  
伝えてあるが、詳細はこれから考えてゆく。

Q-首都圏外への講師派遣とあるが、これから  
PR してゆくのか？

A-これからである。受入れ側の都合を聞き、  
進めてゆく。

Q-マニュアル日本語版の取組みを聞きたい。

A-4月5日の本部理事会でも日本語化を支持  
している。改訂版発行後、3ブランチ合同で邦訳  
を計画するが著作権、販売、保管、文章表現統一  
など、問題は多い■

## 2004 年支部会員は 394 名

4月末をもって登録申込みを締切り、今年度の  
会員数はつぎのとおりです。

ブランチ会員 394 名 (昨年 376 名)

うち本部登録会員 344 名 (同 272 名) ■

## RSCDS 東京支部

チェアマン 五十嵐成子

T/F 048-445-1527

セクレタリ 中田多鶴子 T/F 0297-64-9486

〒301-0855 龍ヶ崎市藤ヶ丘 5-7-5

Email: [wbnsd292@ybb.ne.jp](mailto:wbnsd292@ybb.ne.jp)

トレジャラ 松村 茂 T/F 047-371-9054

委員会メンバー 大井富佐子 03-3330-4676

兼松千奈美 03-3752-6374

境 雅子 047-368-3873

トム鳥山 044-988-7773

吉江紀美 043-237-4715

ホームページ [www.ne.jp/asahi/tokyo/branch/](http://www.ne.jp/asahi/tokyo/branch/)

同担当 吉澤敦子 T/F 0298-41-0767 ■

## 東京ランチ・クラス

### ビギナーズ・クラス

7月26日(月) 1.30-4.30  
以降毎月第2・第4月曜日  
千代田区総合体育館 5F・多目的室 ¥600  
講師 境雅子・神倉那智子  
担当 兼松千奈美 03-3752-6374

### ステップ・ダンス・クラス

8月14日(土) 1.15-2.05  
以降毎月第2土曜日  
講師 櫻井香枝  
幡ヶ谷社会教育館(予定) ¥300  
担当 吉江紀美 043-237-4715

### インターミディエイト・クラス

8月14日(土) 2.15-4.30  
講師 吉澤敦子  
幡ヶ谷社会教育館(予定) ¥600  
担当 吉江紀美 043-237-4715

### アドバンスド・クラス

8月7日(土) 6.20-8.45  
講師 若松陽子  
¥600  
会場は別途ご案内します  
担当 大井富佐子 03-3330-4676■

## Bulletin は隔年発行のマガジンに

- 本部理事会報告 -  
(本部議事録 2004.4.16 から抜粋)

- 4月3日の本部理事会の内容は、
- \* DanceDetails (説明書のインターネット化) は、Scottish Arts Council など外部からの資金援助受領困難と思われ、ミリガン記念基金から支出する。オンライン維持費用の予測、スポンサー獲得を進める。
  - \* 新会員獲得-各ランチは毎年4月29日のユネスコの日にダンス・イベントを行ない、新会員獲得を推進する仕組みとする。実施は2005年から。
  - \* 会員制度変更-年次総会における会員1人1票方式について意見を求めていた。44のランチ、127人の会員から回答があり、1人1票方式を支持するランチは3つだけ、本部直接会員もこれを支持しなかった。よって現行のランチ選出代議員による投票方式が維持される。  
本部直接会員による「国際会員ランチ」の設立ができるかどうか、考えてゆく。
  - \* 本部会費見直し-次回6月の理事会で総務財政委員会の提案を検討する。

\* “Friends of the RSCDS” 設立の可能性について次回理事会で検討する。Friends of the RSCDS -発案はグラスゴー支部で、クラスに参加できなくなったが、ソサエティとのつながりを保ちたいという元ダンサーが対象。年次総会やサマースクールに気軽に参加してもらおう趣旨。

\* 会員とのコミュニケーション強化を再度討議した。本部と会員との直接連絡を図るため、各ランチは会員の住所、電子メール・アドレスなどの提供を求められることになろう。現在のBulletin と Newsbrief に代わるマガジンの隔年発行が提案されている。

### 会員サービス委員会

- \* マガジンの編集チームの人選中。
- \* マニュアル改訂版の最終検討会は4月中旬に行なわれる。
- \* 日本の会員は日本語版発行を強く希望している。日本の3ランチに、共同して日本語版を作るよう求める。

### 教育訓練委員会

\* 新試験制度(案)について支部、エグゼクティブからの意見を求めており、5月の委員会で集約し、理事会に送る。

### 総務財務委員会

\* 本部トレジャラのマリリン・ジェフコートは事業を売却し、実業界を引退したが、RSCDS における役割はそのまま継続してもらおう。

### 英国ティーチャーズ協会

\* ジミー・ヒルから、設立趣意書提出と説明がなされた。理事会の積極的な賛成を得たので、2004年の年次総会のオープン討議で意見を求めることになった。

### その他

- \* 2004年のBulletin で、つぎの2つを募集する。
  - 1) 新マガジンの誌名
  - 2) あなたの好きなダンス1つ■

## ランチ賞スタート

功績顕著なランチ会員に対して、ランチが表彰するもので、本部はその氏名を記録に残し、本部出版物で公表する。(ランチレター前号の「功績顕著なランチを表彰する」は誤り)。表彰は随時行なうことができるが、本部への通知を要する。2004年度会員からが対象となる。

表彰のガイドライン概略はつぎのとおり。

1. ランチに貢献、功績があった人。原則として年1人。
2. 審査の基準、推薦の手続き、受賞者の決定、授賞の方法はそれぞれのランチが決める。
3. すでに RSCDS 功労者賞を受賞した人でもよいし、その推薦を受けている人でもよい■

## ランサーという踊り

(ジミー・ヘル)

みなさんはランサーという踊りをこれから聞いたり、踊ったりすることがあるかもしれない。あるいは両親や祖父母がこの踊りを懐かしく語るかもしれない。第2次大戦の前まで、ランサーはスコットランド全土で踊られていたのだが、いまではごくわずかの地方でしか踊られなくなり、踊り方も変わってしまった。どんな踊りで、どこが発祥の地であったのだろうか？

ランサーはカドリールの中の1種である。カドリールは4カップルのスクエア・ダンスで、各カップルが1回ずつ踊る。3つないし7つの（5つがふつう）フィギュア（セットという）の組み合わせで、セットそれぞれに名前がついている。セットぜんぶを踊ると、1つのカドリールを踊るには約12分を要する。ランサーはカドリール初期のセットそのもので、その後のカドリールの中にもその形が残っている。

カドリールは19世紀初頭のフランスが起源であり、古くからのコチヨン *cotillion* が発展したものである。信じられないかもしれないが、いまのイビサ島（スペイン）がディスコ・ダンスで充満しているのと同様に、フランス革命後のパリでは社交ダンスが隆盛を極めていた。革命5年後のパリに684をこえるダンスホールがあったのである。ワテルロー戦(1815年)のあと、スコットランド、イングランドのダンス教師連中は大挙して英仏海峡をわたり、フランス人の先生とのつながりを求め、新しいダンス、とくにカドリールを勉強したのである。

カドリール狂いと呼ばれる連中が英国をのし歩くほど、この踊りは民衆の心をとらえたが、それにはいくつかのわけがある。古いダンスにくらべ、カドリールは反復が少なく、新しいフィギュア（たとえば *ladies chain*, *double ladies chain*, *grand chain*）が盛り込まれていたためである。またソロ・ダンシングのパートもあり、友人に込み入ったステップを自慢する場でもあった。われわれがいま踊っている *Eightsome Reel* はフランスとスコットランド両方の伝統からもたらされたもので、ビクトリア時代後期の産物である。人気を博したもう1つの理由とは、カントリー・ダンスではパートナーは向かい合っているが、ここでは隣にいるということにある。両親やお付の人の監視の下で、おおびらにコンタクトできるというのが、青年男女にカドリールが広まった理由である。さらに、最初のフィギュアを踊るのはヘッドの2カップルで、慣れないダンサーはサイドにいてその動きを2回観察できるということが大きな要因であった。かくして、カドリールはたいへんソシャブ

ルなダンスであった。

カドリールがエジンバラに紹介されたのは1816年である。ダンスを指導したのはフィンリー・ダンで、かれはワテルロー直後のパリでこれを教わった。われわれは有名な日記人、ミセス・グラント・オブ・ロシマーカスによって、カドリールが紹介されたときの模様を生々しく知ることができる。かの女は当時19歳、フィンリー・ダンが指導する私的若年グループの一員であった。『私たちはカドリールに夢中でした』かの女はダンス・シーズン中、友達と一緒にデモンストレーションをやるため、どのように家具を押し下げて床を広くしたのかを語っている。

1818年、パークリー・ダンが「50のフランス・カントリー・ダンスによる最新カドリール9ダンスの踊り方」を著し、すぐに音楽出版社が金儲けをもくろんだ。同じ年にジョン・ガウが同様の本を出版し、ついで1822年、エジンバラのダンス教師、アリグザンダー・ストラシーが基礎フランス・ダンスのハンドブックを海賊翻訳版で出した。この本にはカドリールで用いられるステップとフォーメーション、それに7つの基本フィギュア・セットが述べられている。

英国にカドリールがもたらされたとき、その音楽はもっぱらフランス産であったが、スコットランド人はまもなくこれをジグ、ストラスペイ、リールで踊るようになった。またこれが世界中にカドリールが広まった隠れた理由の1つである。フィギュアは同一でも、曲とテンポはそのときどきでみな異なる。ワルツのカドリールがあり、ポルカもあり、マズルカによるカドリールもある。変幻自在なのである。

ランサーを含み、カドリールの最大の共通事項はポピュラーソング、オペラ、オペレッタの曲（ロッシニの『スタバトマテル』さえも）を編曲した音楽で踊られたということである。文化は異なっても、カドリールのステップ、フィギュアは各国、各地域で民族舞踊に取り入れられ、その音楽で踊られている。こんにちみなさんはアメリカ、ゴア（インド）、オーストラリア、カリブ諸国、そして日本というように、さまざまところでカドリールに出会えると思う。スコティッシュ・カントリー・ダンシングというよりも、カドリールはむしろ世界中に広まり、地域の民族舞踊に同化したひとつの生命体といえる。

さて、ランサーは上記の文のどこに位置しているのだろうか？ 1820年代のダンス教師はダンス授業で食べており、生徒たちそれぞれを競わせていたということを忘れてはならない。教師たちはカドリールのセット（フィギュア）を考案し始めたのである。そのいくつかは陸軍の連隊名にちなんで名付けられた。ランサーズ（槍騎兵隊）、ガ

ーズ（近衛隊）、フザーズ（軽騎兵隊）などである。

なかでもランサーは重要で、19世紀を生き延びたばかりでなく、ほかのセットが早期に消滅したにもかかわらず、こんにちも生き続けているのである。ランサーのもっとも古い本は1818年にダブリンで発行されたデュバルの本で、「デュバルのカドリール・セット第2集」として知られている。2年後、ロンドンでジョゼフ・ハートの本が出版された。2つの本のセットには共通したところがあり、ハートの書き方のほうが分かりやすい。1822年のストラシーによるエジンバラ本には、7つの「ランサーズ」と呼ばれるカドリールの基本フィギュアが述べられているが、デュバル、ハートの最終フィギュアのもじりである。

デュバルやハートのダンスが19世紀を通してよく踊られていたかどうかよく分かっていない。19世紀の末期、モザート・アランによるボールルーム・ガイド（1880年グラスゴー）ではストラシーのフィギュアを「オールド・ランサー」、ハートのそれを「ニュー・ランサー」と呼んでおり、ダンス史研究者にとって一つの謎となっている。モザート・アランはデュバル版が先に出たのに、古いバージョンとはいっていないのである。20世紀に生き続けた踊り方は、デュバルよりもハート版によく似ている。

しかしながらこれらのランサーのオリジナル版は、こんにちスコットランドで踊られているランサーとは似ても似つかないものである。どうしてそうなったのか、わたしたちは19世紀のダンス発展状況を知る必要がある。

初頭の30年間、ダンシングにおいては爪先をポイントさせ、柔らかい靴が必要で、教師連中はフランスのやり方をきびしく教えた。世紀が進むにつれ、世の中は変わっていった。都市生活の拡大、固い靴の流行、婦人用ドレスの長さや胴回りの変化によってダンシングは爪先よりもボールで踊られるようになり、軽快なウォークで踊られていたものが世紀末にはなんでもOKになった。

Bulletin 16 ページの挿絵 - ダンス・レッスン(クルックシャンク画 1835)。教師は必携品のミニ・フィドルで教えている。若者2人は教師の2nd positionを見習っており、覚えの悪い友だちは部屋の隅で「足枷箱」に立たされている。「足枷箱」は足の欠点を自覚させるお仕置きで、フット・ポジションがよくない生徒は、この箱に立たされた。全 RSCDS ティーチャーは留意すること！

Queen Victoria's Visit Quadrilles (RSCDS Lft 26) は1848年のダンスであるが、オリジナルよりもゆっくりとした音楽で、19世紀初頭のフィギュアをビクトリア朝中期風にアレンジしたものになっている。ダンス音楽も、爪先でリフトする必要

がないものになった。ボールルームではみんなに親しまれた曲を演奏するようになり、歌いながら踊ることもできるようになった。

ふつうのボール・プログラムにはカドリールとランサーがそれぞれ2、3ダンス含まれていて、最初のダンスにはスコテッシュ・リール、2番目はギルバート&サリバンの「ミカド」の音楽、3番目はビゼー「カルメン」からギルバート&サリバン「王女イーダ」にいたる広い範囲の音楽が使われた。これは現代のバンドが Ian Powrie's Farewell to Auchterarder に「熊さんのピクニック」を使うやり方と同じ趣向である。

20世紀中ごろにいたって、ランサーは主としてオールドタイム・ダンスの分野に入り、バスケットのようなフィギュアを取り込むようになった。1949年にビクター・シルベスタの著した本が、こんにち多くの人に親しまれている。

音楽はポピュラー・チューンを使うのがベストと述べている。For he's a jolly good fellow、Johnny comes marching home、There's a tavern in the town（いずれも英国系にはポピュラーな歌）のような笑いと楽しさを持った曲があげられている。ハート/デュバルのもともとのダンスとはだいぶかけ離れているが。

1895年に著名なダンス教師ルイ・ドグビーユはこう述べている。「ランサー、カドリールはめっちゃくちゃで不格好なものになってしまった」。スクエア形式のダンスについて、この一言は本物のダンシングを愛するダンサーへの、当然で十分な警鐘である。

1949年の本でビクター・シルベスタは「いまオールドタイム・ダンサーたちが踊っているランサーは、100年前に踊られていたランサーではない」と書いている。1907年1月のパンチ誌に、ランサーを踊るときはケガしないように注意し、踊るときは甲冑をまとったほうがよい、という笑わせる記事がある。(Bulletin 18 ページの挿絵参照)。レディはサイの皮でできた肘あて、6連のかたぴら式の長手袋、床で滑らないよう2.5センチのスパイクを打った狩猟ブーツを身に着けるといっている。男も同じようなひどい扮装で、亜鉛のヘルメット、鉄底の御者ブーツといういでたちである。「頭のとっぺんをボウルのようにし、他人の足癖に打ち勝て！ 踊り最終回の男にはドアノブをそいつの肩に押し付けてハッパをかけてやれ」。(訳者注。このころのランサーは相当荒々しい踊りであった)

こんにち RSCDS にいるわれわれに、以上がどうかかわっているのだろうか？わたしは大いにあると思う。19世紀を通してスコットランド、イングランドの社交ダンスでカドリールの果たした役割は大きかったが、その末期には1820年代、30年代の隆盛が薄い影を残すだけとなった。同じ

ことがカントリー・ダンスにもいえる。ミセス・スチュワート、ミス・ミリガンがスコティッシュ・カントリー・ダンス・ソサエティを作ろうとした1923年当時、スコットランドの社交ダンス・シーンはみじめな状態であった。

19世紀初頭の英国のダンス・マニュアルを見ると、pas de basqueを除いて、両設立者が再興した各ステップ、フィギュアが、フランスのマニュアルどおりの正確性をもって述べられている。

いまカドリールを本物らしく踊ろうとするなら skip change だけでよく、slip step は不要である。Pas de basque は高くせず、jeté はやらない。4小節目にジェテ・アサンプレ jeté assemblé を加えればそれらしく踊れる。わたしがこのやり方でランサー、あるいはカドリールを指導すると、スコティッシュ・カントリー・ダンサーにいつもたいへんな盛り上がりが見られる。

ほとんどのフィギュアは、われわれにはなじみのものである。Clutha、The Round Reel of Eight、

The Eightsome Reel、Buchan Eightsome、Book 43の Queen's Quadrille は、すべて初期のダンスのまっすぐな延長線上にある。この年(2003)、新ブックのダンスを勉強しようと世界中からセント・アンドルーズにやってきたダンサーたち、かれらもまた、カドリールを習いにパリに押し寄せた1815年のダンサーや先生とまったく同じ流儀のなかにあったのである。

(以上はわたしのカドリールの先生、エリス&クリス・ロジャーのおかげである。2人のカドリールに対する熱意と広範な知識があってこそであった。また、骨の折れる研究と、真のカドリールを演奏している Green Ginger のカロライン・スローンとイアン&メリル・トムソンにも感謝を捧げる。エリス・ロジャーの「カドリール、その始まり、発展と踊りに関するガイド」は2003年末に刊行される)。(“The Lancers” by Jimmie Hill, from the RSCDS Bulletin No.81, Oct 2003) ■

## パリ・ブランチ・ツアー

(Tom Toriyama)

4月7日(水)、18人の面々がパリ行きエールフランス機に乗り込んだ。この便、オーバーブッキングとやらで、幸か不幸かわれわれ全員、エコノミーからビジネス・クラス席に座ることになった。日本人スチュワードスの差別発言には「ケンカしてやろうか」の気分も生まれたが(フランス人乗務員はさすがに大人、なにも言わない)、まあ快適な飛行だった。シャルル・ドゴール空港でリヨン行きに乗り換えるとき、きびしいボディチェックがあり、一同「欧州は徹底しているね」。

日が沈むころにリヨン、サンテグジュペリ空港に着き、リヨンのグループのボス、クリスチャン・オルグレが出迎えてくれた。あす夕刻の再会を約してわれわれはバスに乗り込む。30分後、ホテル「ル・メリディアン」に着き、鍵をもらってこの日は終わった。部屋はみな39階の上級だった。

翌日午前中は市内観光で、日本人ガイド廿日岩嬢の説明は当を得たものであった。3月末はやや暖かかったが、このところ平年よりもすこし寒いという。日本の3月上旬の気候だった。パラシュ駅近くのレストランで昼食。魚のすり身はあまりおいしくない。食事が終わるころ、マギー、ラファエル、ベロニク、フランソワーズ、ピーターの5人が現れた。18人が博物館組、買物組、観光組など5グループに分かれ、このリヨン・グループのメンバーが案内してくれる。クリスチャンの手配である。辞退したのだが、かの女のせつかくの好意、甘えることにした。にわか雨の中、それぞれの目的に向かって面々は席を立っていった。あ

とで聞いたところでは、マギーたちは親身になって世話してくれ、地下鉄、路面電車を利用し、あるいは徒歩で充実した午後を過ごしたという。

6時、クリスチャンがホテルにやってきた。これからダンス会場に向かう。ラッシュ時で、かの女の勧めにより市バスに乗る。18人分のお金を払おうとしたら、ドライバー氏「日本人が18人、うれしいねえ。みんなおれの友達だ! お金、いらぬ!」。みんなますますリヨンが好きになってしまった。

ダンス会場はソーヌ川沿いの有料イベント・ルームである。イースター休暇で公営の会場はぜんぶ休館、リヨン・グループも活動休止中のところ、東京側の依頼によってクリスチャンが人、場所を確保してくれた。あたまが下がる。地元と日本人のほかにジム・クック、サマンサ・シャッドの英国講師が加わり、ミニ国際クラスとなった。クリスチャン、ラファエル、サマンサがポーのボール中のダンスを指導し、ジムが Fire in the Rye、わたしが The Quayside Strathspey をやった。地元人は経験者が少ないようだった。



リヨンで踊る(写真提供 若松陽子)

9時半にクラスを終え、近くのレストランで夕食となる。魚（スズキ）のグリルかラムのシチュー風の選択で、ラムはやわらかくうまかった。フランスの食事は長い。リヨン・グループの車でホテルに着いたとき、零時を回っていた。

9日はツールーズまで500kmの長丁場である。8時にホテルを出る。10時ごろイースター休暇でスペインに向かう車の自然渋滞に巻き込まれ50分をロスする。昼近くやっとアビニヨンにつき、橋や教皇庁の見物もそこそこに昼食となる。ゆっくりできなかったのがとても残念だった。ガイドはゆかりさんという、高橋尚子さんによく似た顔立ちの人。ニームでローマ時代の円形闘技場を見物する。いまでも闘牛など各種イベントに使われているという。

ツールーズは右車線へ、直進するとバルセロナというナルボンヌの分かれ道で、バス・ドライバー、ジャッキー氏はまっすぐ進んでしまい、20分をロスする。わかっていながら腕が動かなかったようだ。ホテル着は9時近くで、ブッフ・ブルギョニン（ビーフ・シチュー）のコース。まずはなかったが、ただそれだけの味だった。

ツールーズ市の中心、カピトル広場に面したホテル「クラウン・プラザ」の設備はこの旅行中最高、広場で朝市準備が始まる7時20分、心を残しながら出発する。ガイドはフランス人夫君と市郊外に在住の近藤さんで、歯切れよく、説明もていねい。かの女の案内で、カトリックの第4の聖地、ルルドを見物する。1858年に出現した奇跡の泉の水を頂戴し、武運長久、無病息災を祈る。

バス内でサンドイッチをとり、1時に近づくころポー市のホテルに着く。ダンス行事がなければ、このピレネーのふもとの町に来ることもなかっただろう。ホテル「コンチネンタル」では満面の笑顔でケン&ノコ春日さんが迎えてくれた。19世紀末に建てられて、以後わずかの改修のみと思われるクラシックなホテル（パリ支部が手配）からダンス会場までは、歩いて5分ほどだった。

午後2時、アン・ディックス&ジェニファー・ウィルソンによるクラスが始まる。200人が集まっても余裕がある、すばらしい会場（パレ・ボモン）である。アンはワイヤレス・マイクを使って指導する。200人の住所は、英国106人、フランス62人、日本21人、ベルギー4人、その他といったところで、フランス在住の英国人もかなりいるから、このイベントは6割がた英国人である。

パイパー先導による各ホテルから会場までの行進（5分ほど車通行をストップさせたが、ドライバーたちはニコニコしている）、ボールの雰囲気をついそう盛り上げた日本女性のきらびやかなドレス（パリ支部から感謝された）、本物のPas de Basque（バスク地方の足さばき）のディスプレ



ジーン&イアン・マーティン夫妻と

一鑑賞などあったが、イベントの様子はヨーク支部のマーガレット・ハイエットの的確な記事があるので、別項をご覧いただきたい。

月曜の昼食を終え、解散となった。欧米式に開会のあいさつもなければ、閉会式もない。まだポーに残る人からたいへんな見送りを受け、われわれは専用バスでポー空港に向かった。パリ南のオルリ空港で現地男性ガイドの大場さんの出迎えを受け、ルーブル宮近くのレストランで夕食をとったのち、14区のホテル「ソフィテル・フォーラム」に到着した。

翌日は自由行動日。モンサンミッシェル修道院に行く人もいれば、パリ市内を見物、ショッピングという人もいて、それぞれに1日を過ごした。帰りの飛行機もビジネス・クラス、というわけにはいなかったが、心にたくさんの思い出を詰め込んでパリをあとにした■

## A Trip to Pau

（マーガレット・ハイエット、ヨーク支部）

アランとわたしはパリ支部の20周年に参加した。わがヨーク&ハンバーサイド支部からはヘレン&イアン・ラッセルとピーター・デイビスも参加した。いつも日本人ダンサーと一緒に、マルカムの名前が敬意をもって語られていた。

アン・ディックスは優秀だった。広いホールで数多くのセットを見事に動かし、まるでうしろにも目があるかのようなようだった。ダンサーにはきわめておだやか、いつもほめていた。「うん、いいわね。でももっとうまくできるわよ」。これはクラスで役に立つことばである。ダンサーはアンの作ったThe TrimarinerとCulla Bayを楽しんだ。そしてアンはこのイベントのために作ったVive la Danseを指導した。かの女はパリ支部のダニエル&ジェリー・ライNSTAYNのためにMontparnasseというダンスも作っている。

ボールでは Green Ginger がすばらしい音楽を提供してくれた。もう 1 人のフィドラー、キース・スミスは 9 日 (グッド・フライデー、イースター直前の金曜日)、ライアン航空 Ryanair で到着のはずが、オーバーブッキングでロンドン・スタンステッド空港に取り残されてしまった。かれは翌日のクラス中にやってきた。クラスが 3 回、ボール 2 回の時間割だった。アンは The Chequered Court をとりあげてくれ、わがヨーク & ハンバーサイド支部に気をつけてくれたのではないかと思った。

ホールは巨大窓つきで広く、すばらしかった。ポーは丘の上にある町で、晴れた日にはピレネー山脈を見ることができる。ホールからも山なみかもやの合間にチラッと見られた。スキーヤーにびったりのかんりの雪をかぶっている。これ以上の場所を探すのは難しかろうという会場だった。マリーソランジュ・ポラルが率いるスタッフはすばらしい会場を見つけ、ホテル 3 つを予約し、すてきな食事を用意し、すべてのダンシングを取り仕切った。

土曜の 5 コースのディナーにつくと、テーブル全面は赤い花びらで飾られていた。翌日は飲み放題の各ワイン試飲のあと、参加者全員が赤いベレーをかぶってディナーをとるというわけで、われわれはまさしくフランスを感じとった。ヨークのウィークエンドで、ベレー帽に代わるなにかがあるだろうか？ なにもない。

アランは 11 時までならマジメに踊る人だが、このときは 1.30am の McLeod's Fancy まで熱がこもっていた。こんなことは二度とないと思う。ポーはすてきな町だが、ダンスでもなければ訪れる機会のないところである。何人かは終了後、ルルドへ列車で脚を伸ばしたり、ピレネーへのドライブを楽しんだ。

ウィークエンド参加者は、みんなリラックスし、みなフレンドリーだった。ボールでは全ダンスにリカップがあり、ワイン数杯の入った頭が混乱しないよう、ダンス・スタート部分をもう一度述べるというやり方だった。ジーン・マーティンがはっきりしたフランス語で祝辞をスピーチした。RSCDS の会員だからこそ、こうして集えるのであり、私もその国際的な組織の一員であることがうれしかった。

帰りは飛行機が遅れ、約 30 人が 8 時間遅れで家にたどりついた。だれか “Returning from Pau with Ryanair” というダンスを作ってくれないかと心待ちにしている。でもフランスで過ごしたすばらしい日々にくらべれば、それはほんのささいなことにすぎない。

つぎのパリ支部のウィークエンドは 4 年後にやってくる。イベント参加を考える値打ちは十分にあると思う (“A Trip to Pau” by Margaret Highet, from “Broun's Reel”, the Newsletter of RSCDS York & North Humberside Branch, May 2004) ■

## フランクフルトへダンスの旅

(ケン春日)

昨年のケルンのグラン・バルに続いて 2 度目のドイツダンス旅行となった。フランクフルトの大舞踏会は毎年 1 回、4 月に開催される。ドイツを代表するグラン・バルのひとつで、今年は 4 月 17 日 (土)、36 回目になる。場所は空港からタクシーで 20 分ほどの市郊外のハッターシェイム、会場は結婚式も行なわれる市の多目的ホールである。ダンス場は木製タイル張りだが、コンクリートに直貼りなのでコチコチ、ショックがひざを直撃する。ダンスの合間にバッフェ・ディナーができるよう、周囲にテーブルがセットされている。

音楽はキース・スミスとクリスティーナのフィドル、アンゼルス・リングナウのピアノできわめて心地よい。

余談だが、一般的にドイツの楽団はテンポが速い。騎兵隊の突撃を鼓舞するようなスピードで演奏する。ストラスペイも早くて、優雅に踊ってられない。メロディを楽しみながら音楽に合わせて踊るのではなく、音楽にせかされて踊るようである。

今日はマエストロ、キースが加わっている。音楽を楽しみながら踊れた。パリから参加した仲間も、ケルンのバルのときはあまりに速い音楽に渋い顔をしていたが、今日はニコニコしている。フランクフルト・グループの代表者、アンゼルスは総司会、ピアノ、MC と大奮闘である。ヨーロッパにはこういう多芸多才の人が多い。

参加者はドイツ各地、欧州、英国から 120 名くらい。バッフェ・サパーをはさんで 18 ダンスを踊る。わたしたちのテーブルはスコットランドからアルフ & マリアン・ヤング、パリのジネットとポール、ジュネーブからデビッド、英国のジム・クックである。ジムは欧州各地のバルの常連である。

ドイツのダンサーは若い人が大半で、それに男性が多い。昨夏、猛暑のグルノーブルで踊ったドイツの女性たちに再会する。やあやあと握手だけである。ドイツはフランスと違って、あまりチュチュっとしたり抱き合ったりしない。さっぱりしている。残念！

みな若いだけに元気がいい。キースたちの音楽



にダンスごとに大拍手、アンゼルクもちょっと拍手が長めだと、よしアンコールいこう、と10ダンスもアンコールとなった。ダンスはすべてリカップのみだが、アンコールが加わって終了は午前1時すぎになってしまった。クタクタである。

会食中に、ことし6月を目指してドイツ初のランチ設立を推進中とのあいさつがあった。マルチナがセクレタリとしてデスクワークを行なっている模様である。ドイツには500人くらいのダンサーと多くのクラブがある一方、ランチがひとつもないのは不思議であった。ドイツでは戦後このような団体結社は禁じられていると、もっともらしくいわれてきたが、実際はそうでもないらしい。フランス人にいわせると、「かれらは楽しく踊ればそれでいいのよ、RSCDS とのつながりなんか興味ないのよ」である。

翌18日外国から参加のダンサーたちとフランクフルト市内を散策する。10年前、仕事でよく来たところである。高いビルがいくつか増えたようだ。相変わらず人種のルツボで、アラブ系が以前よりも目につく。歩行者天国のショッピング街はグラン・マガザン（百貨店）が並ぶ。ドイツの都会は犬が少ない。フランスはそこら中に犬の落し物があるけれど、ドイツでは安心して上を向いて歩ける。

4月19日はダルムシュタット・ダンス・クラブのソーシャル・ダンスに行く。フランクフルト南の郊外、場所は欧州共同のヨーロッパ宇宙機関 European Space Agency の建物の中にあり、クラブ・メンバーにここで働く科学者がいて、その関係で利用している。入口でパスポートを預け、用紙に記入し、ビジターパスをぶらさげると、ものしいセキュリティである。千代田区一番町の英国大使館にダンスに行くのと同じ。

4セットほどで、男女半々。男性は男性として、女性は女性として踊るので、はっきりしていてとても踊りやすい。みな若くて明るい。間違えてもワハハハとにぎやかである。2時間半ほどダンスを楽しんだあと、メンバーの案内で場内を見学する。かなり広い敷地に大きな建物がいくつもあって、各部屋にはコンピュータがずらりと並ぶ。サテライト、スペースシャトルなど1時間にわたり説明を聞く。ふつうではなかなか入れないところなので興味深かった。

4月20日、エバとアンゼルクが主宰するフランクフルト・グループのクラスに参加。フランクフルト市内の小学校体育館である。会員有志と軽食後、7時から10時までクラスである。前半は初心者、後半は経験者となっているが、後半まで残っている初心者には経験者が付き合っただけで踊るので、最後までいる人が多い。

時間どおりに現れたのは男性12人、女性が6

人。ちょっとギョっとする。初心者クラスだからケンも付き合ってくれ、と女性側に立たされる。これは弱ったな、1st corner は逆だぞとか、いろいろ思いめぐらす。やさしいダンスだったので、初めての女性役をぶじ終了した。Ladies chain などあったら迷子だったなと冷や汗ものだった。

後半からだんだん人が集まり、初心者も残っているのでも5セットくらいになった。経験者が初心者のパートナーとなって引っ張ってゆく。初心者も嬉しそうである。若い人が多いので、足はでたらめだが飛んだり跳ねたり、おそろしく元気がよかった。

帰りにビールで何杯も乾杯する。ドイツのビールはソフトでうまい。2、3パイントは軽く飲んでしまう。深夜に散会となった。

日本のみなさん、ドイツにはいたるところにダンス・クラブがあります。ドイツ旅行にはダンス・シューズをお忘れなく■

## 「日出ずる国」でダンシング

(マギー・ペイユ、リヨン)

神戸のグループ、関西ホワイトヘザーダンサーズで踊った初めてのフランス女性がわたしです。ちゃんと記録しておいてね！

絵を描くとき、彫塑を作るときはちょっとしたアーティストティックなきっかけが必要で、20世紀の有名な画家、クロード・モネの「日出ずる国」ということばがなかったなら、このレポートを書き始めることができなかつたかもしれません。

トムとは、セント・アンドルーズのサマースクールでずっと前から会っていました。(わたしは9年続けて参加しています)。この4月、かれはリヨンに来て、みんなとダンシングを楽しみました。パリ・ランチ主催のイースター・ウィークエンドに行く途中、リヨンに来たのです。わたしは翌5月、京都に住むフランス人の友人たちを訪れることにしていましたので、踊る機会があれば場所と日取りを知らせてほしいと、かれに頼んだのです。

京都近辺で踊る機会は1回だけ、神戸でした。それも日本に着いたその日というのです。まあいいか、です。日本で踊りたいという思いはとても強くて、わたしは自分にこう言い聞かせました。「行こう！2日間眠らなくて気にしない！50になる女がやれるのはビタミン剤とカフェインをたくさんとることしかない。それが仕事！スコティッシュ音楽がシャンとさせてくれるし、7時間の時差ボケなんか気にしない！」

会場までどうやって行ったらいいか、わたしを安心させるためトムはほんとうによくやってく

れました。電子メールでかれはこんなふう知らせてくれました。

Maguy, I planned your timetable for Sunday 16th of May as follows:

13.35 Leave CDG by AF292

08.30 Arrive KIX. Will be picked-up by Tom

09.30 Leave KIX by coach

11.00 Arrive Sanno-miya Sta. in Kobe. Then we will get a taxi

11.10 Arrive the dance venue, Kobe Foreigners Club Dance and Lunch and Tea/coffee

17.00 Prendre fin

17.39 Leave Sanno-miya Sta. by train with Tom

18.28 Arrive Kyoto Sta. Au revoir to Tom

Happy dancing.

リヨンから大阪まで 14 時間、手荷物に入れるドレスはどれにしようか（女ですもの）、マッチするベルトはどれか（アーティストであろうとなかろうと考えるわよね）、さんざん迷いました。結局、すべての色を代表する白にしました。時間を節約するため、機内でドレスに着替えたのです。われながらいいアイデアでした。

ダンス会場に入ったら、La Flora が始まるところで、イスにはノリ〔有田典和さん〕が腰を下ろしているではありませんか。ノリとわたしが4番目に入ってセットが出来あがり、べつのセットを見たら、そこにミユキ〔有田深雪さん〕がいました。ぜんぶで7,8セットでした。ノリとミユキとは1998年のサマースクール以来、6年ぶりでした。ミユキはかの女のお母様、そしてそのほかの友人も紹介してくれ、つぎのダンスをともに踊りました。プログラムはすてきに組まれていて、ランチまでこのグループのダンサーと踊ったのです。トムから送られたチラシにはジグ6ダンス、ルール6、ストラスペイ6ダンスという順序で載っていたので、日本ではジグをぜんぶ踊ったあと、ルール6ダンスに移り、終わりにストラスペイを続けて踊るやり方かと、初めは思いました。

食事のあと、トムが正式にわたしを紹介し、とても暖かい歓迎を受けました。追加の錠剤を飲むために1ダンス(Muirland Willie)を外しましたが、終わりまでぜんぶを踊りました。休憩時間にはミュージシャンの演奏があり、レディス・ステップのデモがありました。このときウエイトレスの格好に扮した男性2人が現れ、片手にグラス2



トム わたし ノリ

個のをせたトレーを掲げて3人のデモ女性と一緒に同じステップで踊ったのです。ものすごく愉快で会場は大爆笑、たいへんな拍手でした。集合写真を撮り、みなさんからことばをかけていただきました。2004年5月16日にお目にかかったみなさん、ほんとうにありがとう！この思い出はずっと残るでしょう。

東京で踊ることがあったら、わが家に泊まれとってくれたケンとノコ〔春日さん〕、行きたかったけれど都合がつかなくてごめんなさい。スコットランドまで浴衣を持ってきてくれた長峯真弓に感謝していますし、リヨンを訪れてくれたみなさんにお礼申します。そしてトムからわたしを引き受けて、北京都の友人の手に引き渡していただいたカツコ〔於保香津子さん〕、ありがとう。

京都ではたくさんのお寺や目を見張る庭に行きました。(トム、あなたは京都、奈良に行ったことがないそうだけれど、行かなきゃだめよ!)ほとんど自転車を使いましたが、歩行者、お店、むこうから来る自転車のあいだを縫って、左側の歩道を進みました。右肩すれ違いを忘れないようにして、です。みなさんにはどうということもないでしょうけれど、フランスでは右側を走るんです。新しい経験のひとつです。そのようなことが数多くありました。わたしは昨年9月に3,800メートル上空からスカイ・ダイビングを初めてやりましたが、日本はそれと同じくらいの感覚でした。みなさんにキスを送ります。SAYONARA。(Mes Impressions, au pays du "soleil levant" by Maguy Paillet 原文は英語) ■

## 新 CD 紹介 (Tom Toriyama)

### (1) The Luckenbooth Brooch (HRMCD558) – The Dances of John Bowie Dickson by Sandy Nixon and His Scottish Dance Band

The Luckenbooth Brooch (8x32J), Tak Tent (5x32R), The Wind on Loch Fyne (3x32S), The Chairman (8x32R), Cornet's Chaise (4x40J), The Pigeon on the Gate (4x32R), The Quern (3x32S), Pinewoods Reel (8x32R), Marie's Farewell (8x32J), The Marchmont Eightsome (1x96R), Dalry Strathspey (8x32S), Christina MacLellan (8x32R), The Cuddy (8x32J), Baldy Bain's Fiddle (8x32R), Gypsy Glen (3x32S), Bannockburn Reel (4x32R), Reel of the Puffins (4x32R)

**(2) Dancers' Choice 2 (HRMCD602) by Robert Whitehead & The Danelaw Dance Band**

Dancing in 2000\* (4x40R), Julian's Jig (8x32J), Ghillie Laces\* (8x32S), Bon Accord (8x40R), Widdershins\* (8x32J), One for the Millennium\* (3x48S), Morpeth Rant (6x32R), King o' the Rookery\* (8x32J), Monadh Liath (8x32S), Folsy Fivesome (5x32R), Muckle Burn\* (5x40J), The Viking Ship\* (4x32/32M), Bean Shea Fancy (5x48R), Two Furlongs (6x32S), The Clan Reel\* (4x32R)

\*はダンス解説書つき

**(3) Many Happy Returns (HJC2003) by Hanneke Cassel and Dave Wiesler**

On the Morning Tide (8x32H), Many Happy Returns (8x32S), Arthur's Seat (8x32R), A Wee Nothin' (Miss Hannah's Jig) (8x32J), The Saint John River (4x32S), Caberfri (8x32R), The Quaich (8x32S), Haddington Assembly (8x32J), McGregor's Leap (8x32R), Irongray (8x32S), Laird of Milton's Daughter (8x32J), Daybreak (Waltz)

**(4) Vintage Goldring (SSCD16) by Muriel Johnstone & Keith Smith**

Crossing the Brook (8x32R), The Sands of Forvie / Jack's the Lad (3x32S), Vintage '62 / Cathy's Wedding (4x32J), Dancing On (8x32R), Sunanne's Strathspey (6x32S), Inchmickery (5x32J), Mr Hamilton's Hornpipe (8x32R), The Partnership / Evelyn's Dance (3x32S), The Pele Tower / The Post Chaise (4x32J), Miss Johnstone of Ardrossan (5x32R), The Chain Walk / Chantry Hall (3x32S), Findlay's Jig (8x32J), In Campbell Country (4x32S), St Columba's Reel (8x40R), The Blue & White Quilt / The Scribe (8x32J), The Double Diamond Strathspey / Hutton Castle (4x32S), Rockside (1x96J), Sgurr Alasdair / Brackla Hall (5x32R)

**(5) Land o' Heart's Desire (SHIELCD015) by Norma Ritchie**

The Road to the Isles, Ye Banks and Braes, O' Weel may the Boatie Row, Northern Lights of Old Aberdeen, Land o' Heart's Desire, The Gallant Water, Amazing Grace, The Song of the Clyde ほか全 23 曲

**(6) Set Two (SHIELCD012) by Ian Thomson Scottish Dance Band**

Pipe Reel, Boston Two-Step, Continental Waltz, Dainty Duncan (4x32J), Medley (9/8 - 2/4 R), Canadian Barn Dance, The Scotch Circle (4x32R), Fiddle Solo (Slow Air, March Reel), Polka, Waltzes, Strip the Willow, Gay Gordons, Misty, Eva Three-Step, Montgomerie's Rant (4x32R)

前号でご紹介したハートビート CD、購入いただいた方々から「演奏、なかなかよかったよ」の感想をいただいている。それはさておき、

(1) は 1998 年に 80 歳で亡くなったジョン・パウイ・ディクソン創作のダンス音楽選集である。ジョンはスコットランド生まれ。長年カナダ、アメリカで暮らし、晩年はエジンバラに戻って同地のデモンストレーション・ダンス・クラブ Dunedin Dancers の指導にあたった。特異な才能であったためか、あるいは RSCDS にかかわりたくなかったのか、RSCDS のブックにかれのダンスはない。

ジョンはサンディ・ニクソンの演奏を好み、たがいに意気投合した仲間であった。ジョンの死後 6 年、かれへの追悼と、ジョンのダンスにもっと親しんでもらいたいとの願いでこのアルバムが作られた。Lothian Collection、Dunedin Dances Book 1-5 などからそれぞれ 1、2 ダンスを選んでいる。ジョンのダンスはいくらかトリッキーなところがあり、ダンサーがある程度の経験と能力をもっていれば楽しめるダンスが多い。

演奏であるが、個人的好みから言えば、サンディ・ニクソンはテンポの速い演奏が多く、わたしは好みではない。テクニックを自慢する傾向もある。だがそういったところが逆に人気のもとでもあり、かれが演奏するボールはいつも満員という。サンディがリード、ハミッシュ・スミスが第 2 アコーディオン、あとはピアノ、ベース、ドラムスのリズムなので潤いに欠けるが、リズムは明快で

バンドネオン式奏法もふんだんにあり、ダンサーには面白く、踊りやすい。

〔注文略号: サンディ・ニクソン CD ¥2,600〕

(2) のロバート・ホワイトヘッドとデーロー・バンドの CD はブランチレター No.58 で紹介した「ダンサーズ・チョイス 1 (マリアン・アンダーソン楽団)」に続くもので、非 RSCDS ダンスばかりである。2つのアコーディオン、フィドル、ピアノ、ドラムスの楽器編成で、ロバートの奏法はサンディ・ニクソンとは対照的に、キーを離す前に別のキーを押すといった感じである。さみだれ式であるが、ピアノ、ドラムスがはっきりしたリズムをとっているのでダンシングには支障がない。Bon Accord の 12 小節フレーズは 4 + 8 小節の演奏である。〔注文略号: デーロー CD ¥2,600〕

(3) は米国産で、フィドルとピアノのデュオ。フィドラー、ハネキ・カッセルはバークリー音楽院を出て 1997 年の米国スコティッシュ・フィドル・コンクールで第 1 位、とライナーノーツにある。ピアノのデイブ・ウィースラーは助っ人として英米の多くのレコーディングに加わっている実力プレーヤー。ハネキのフィドルは力強く、メリハリがきいている。ストラスペイを聴くと、バーバラ・マコーエンを髣髴とさせるところがある。演奏はゆったりしており、8 分 50 秒の Irongray にはフォスも目を丸くすることだろう。曲は Wm. マー

シャルやトラディショナル曲が多く使われている。**The Saint John River** は、これで踊るとカナダの大地はだいぶ湿っぽい印象を受けるが、リスニングには最適。**The Quaich** の演奏だけでも、このCDを入手する価値はある。

〔注文略号:ハネキ・カッセルCD ¥2,600〕

(4) はおなじみミュリアル・ジョンストンとキース・スミスのCD。前作“Cairngorms”から6年ぶりの新アルバムで、タイトルからもお分かりのようにロイ・ゴールドリングのダンス集である。“14 Social Dances for 2000”と“Leeds RSCDS 40th Anniversary Book”の29ダンス中、25ダンスがこのCDで踊れる。フィドルはキースの人柄そのままに、おだやかで押し付けがましきのない、清澄な演奏である。ミュリアルのソロがほんのわずかあるが、ビンテージもののアップライトの音色が気になる。わたしは **St Columba's Reel** と **The Double Diamond Strathspey** が踊り・音楽に一体感があり、好ましいと思う。ミュリアルはこのほかに3種のCDを今年中に出す計画という。入手次第、ご紹介したい。

なお、このCDはサマースクールで入手可能と思われるので、二重購入とならないようご注意ください。

〔注文略号:ミュリアル・ジョンストンCD ¥2,600〕

(5) は「ハードビートCD」で **Skye Boat Song** を歌っていたノーマ・リッチーのスコットランド・ソング集。ノーマはソロ・シンガーとして来日したことがあるという。クラザッハ(ハーブ)の名手でもあり、このCDでも随所に弾き語りを聞くことができる。伴奏はデビッド・ホール、ジュディス・スミス、ジリアン・カミングズ。スコティッシュ・ダンス音楽をずっと聞いているとき、合間にこのCDを聞くとほっとする。

〔注文略号:ノーマ・リッチーCD ¥2,200〕

(6) は、英国で一般に親しまれているのはRSCDSダンスよりも、このようなポルカ、ワルツありのケイリ・ダンスである。祝いの会やバーンズ・ナイトではこどもからお年寄りまで **Canadian Barn Dance** や **Gay Gordons** を一晩中楽しむ。このCD中の **Strip the Willow** はジグを使っている。フォックストロットで踊るのであろうが、エロール・ガーナー作のジャズの名曲 **Misty** をスコティッシュ・バンドが演奏しているのも面白い。カントリー・ダンスはいずれもきちんとした演奏である。リーダーのイアン・トムソンはグリーン・ジンジャーのイアン・トムソン(フィドル)とは別人。

〔注文略号:イアン・トムソンCD ¥2,200〕

上記の商品のご注文は  
郵便振替 00240-0-63517 東京ブランチ  
締切り 7月30日(金)  
(価格は送料込み)  
お渡し予定 8月下旬 担当 トム鳥山■

## International Weekend 東京ブランチ 20周年記念

2005年1月28日(金)ー30日(日)  
鎌倉プリンスホテル(七里ガ浜)

ティーチャー アン・ディックス &  
レイチェル・ウィルトン  
ミュージシャン デビッド・ホール &  
ジュディス・スミス  
定員 100名

参加費 ¥40,000の予定  
(くわしくは後日ご案内します)

### グループ行事案内

東京都フォークダンス連盟  
8th SCD in Tokyo

7月24日(土) 9.50ー15.00  
東京体育館サブアリーナ  
ピアノ 市川洋子、フィドル 菊池 孝  
連盟会員¥1,000、非会員¥1,200  
連絡先 連盟事務局 03-3736-7811

大和スコティッシュカントリーダンスクラブ  
18周年サマーボール

8月1日(日) 11ー16.00  
茅ヶ崎コミュニティホール  
¥5,000  
梶野幸雄 0466-44-3537

イングリッシュダンスを楽しむ会・  
比較舞踊学会研究部共催

English Country Dance 講習会  
講師 ブルース・ハミルトン  
9月18日(土) 10.00ー19日(日) 4.30  
聖徳大学体育館(JR松戸駅東口5分)  
¥8,000 解説書・CD1枚含む  
定員80名・締切り8月15日  
池間博之 045-982-8528

長岡アンティーズ  
第10回パーティ

10月6日(水) 11-4.30 予定  
ダンス後の交流会にもぜひご出席を  
大島公民館(長岡市)  
田中一美 0258-27-1866

次号は10月発行予定。11月-1月のお知らせを